# ヒップホップの想像力、攪乱される秩序：ポスト公民権時代と黒人社会の(再)分節

# Hip-Hop Imagination and Disruption of Order Disaggregating Black America in the Post-Civil Rights Era

**藤永 康政**（本学部助教授）



虐げられたものの視点から語ること、それをわたしは断乎として拒否する。なぜならば、自分が犠牲者だと思っているかぎり、「視点」などもてないからだ。犠牲者の立場に自分を囲い込んだ語りは、己を縛りつけている鎖の縛りを強くするだけである。獄吏はそれに安心するのだ。

ジェイムス・ボールドウィン

ニガーNiggerとは首にロープを巻かれて木から吊される奴ことだ。俺はニガNigga。ニガの首には純金のネックレスがぶらさがっている

トゥパック・シャクール

## 序論：人種の意味論の転回

本稿は、アメリカ合衆国（以下、アメリカ）の都市を発祥の地とし、人びとを分割する境界線を超えて巨大なオーディエンスを現在獲得している文化様式、ヒップホップの〈人種の政治〉politics of raceを考察するものである。日本では「ダンスやそれに用いる音楽」として一般に認識されていることからすると意外かもしれないが、この文化は、アメリカにおいて、狭義の政治はもとより、都市社会、人種、人種主義、さらには犯罪といった諸問題と密接な関係にある[1]。早速、そのような事情が浮き彫りになった事件を紹介しよう。

2006年5月17日、19歳のイタリア系アメリカ人青年による黒人青年殴打事件の刑事裁判の陪審員選抜が始まった。陪審員の候補として裁判所に招集されたものは、被告弁護人から実に奇妙な質問を受けることになった。彼ら彼女らは、「ラップ・ミュージックを聴きますか？」「ヒップホップ・カルチャーについてはどれくらいご存じですか？」と尋ねられたのだった。そして弁護人は、ノーと回答したものを、「白人」である被告に対し不利な先入見をもっているとして、陪審員から除外することを要求したのである。

問題の事件はそもそもこのようなものだった。被告のニコラス・ミヌッチNicholas Minucciは、ニューヨーク市クイーンズ区のハワード・ビーチ地区で、22歳の黒人グレン・ムーアGlenn Mooreを追い詰め、野球のバットで殴打し、頭蓋骨骨折の重傷を負わせた。この暴行事件にひねりを加えたのが、そのときにミヌッチが発した言葉である。ミヌッチは、ムーアに「文句あるのか、このニガー」" What's

up?, Nigger”と詰め寄り、この言葉を繰り返しながら殴り続けた。その結果、彼の罪状には、傷害に加え、「ヘイト・クライム」が加わり、すべての罪科で有罪となれば25年の懲役刑に処される可能性が出てきた。そこで被告弁護人のアルバート・ゴーデッリAlbert Gaudelliは、傷害での有罪は認めつつも、「ヘイト・クライム」の罪科を否定することを選択した。「ニガー」という言葉は黒人に対する蔑称ではない、ミヌッチが発した「ニガー」の意味は、これまで使われてきた意味とは異なるというのである[2]。

「ニガー」は、もちろん、一般的に言って、「黒人」に対する攻撃的なまでに侮蔑的な言葉である。この事件を報道している『ニューヨーク・タイムズ』も、直接的な表記は避け、政治的に妥当だとされている婉曲語法「Nから始まる言葉」“N-word”を使っているし、判例をみても、10年ほど前には、この言葉の使用は頑迷な人種主義者の徴だった。たとえば、1995年、世界の耳目を集めた「O・J・シンプソン裁判」で、高名な弁護士を集めたことで「ドリーム・チーム」と呼ばれたシンプソンの弁護団は、検察側の証人だったロサンゼルス市警捜査官がこの言葉を発しているテープを証拠として用い、黒人のシンプソンに嫌疑がかかったのは捜査に人種偏見があったからにほかならず、被告は無罪であると主張した[3]。つまりミヌッチの弁護団は、ここわずか10年間で、「ニガー」の意味論が180度の転回をしたと主張したことになる。

実のところ、被告の関係者の主張には、法廷戦術上の単なる方便だとは考えがたいところがある。ミヌッチの母親は、家族がクイーンズのなかでもエスニシティの面で極めて多様なリンウッド地区で育ち、息子の友人には近隣の公共住宅に住むラティーノや黒人も含まれていると説明、「この辺りの子供はみんなこの言葉を使っているんです、昔とは違うんですよ、人種なんて関係ないんです、そんなところで育ったんです」と公判開始時に記者団に語っている。その後、弁護側の証人も法廷で彼女の見解を支持、ヒップホップ・アーティストたちが頻繁にこの言葉を互いの愛着を示すものとして使用し、そしてまたこの文化様式が若者のあいだで幅広い人気と強い影響力をもっているがゆえに、現代の青少年のあいだでこの言葉は侮蔑的意味合いを込めて用いられてはいない、と証言した[4]。

悪質なパロディに聞こえるかもしれないが、被告側の主張を、今日流行している用語に思い切って翻意すると、こう表現できる。【アメリカの都市の多様な空間が、人種主義的概念の指標を脱構築した、シニフィエはシニフィアンより常に過剰に存在する、その過剰さがこの裁判の争点である】。かくして、ポストモダンの用語は、複雑な現象を説明する用語を提供する一方、壮絶な現実を覆い隠すレトリックとしても機能する。血餅のついたバット、その暴力は、この洗練された論理の外部に厳として残るのだ。

このとき弁護人は、「ニガー」という言葉が人種主義的であるとする主張の挙証責任は検察側にあると主張した。言葉の意味は話者の意図から離れるものだから、意味の形成は一義的には言葉を受けとった側の行為であるという論陣を張ったのだ。一見したところ実に今日風の言語論である。ところがこの論理は、法手続き上の問題として、人種隔離制度segregationを合憲と判断し、抑圧的人種関係が形成される起点のひとつとなった19世紀後半のプレッシー判決のそれと近似したところがある。1886年、ヘンリー・ビリングス・ブラウンWilliam Billings Brown連邦最高裁首席判事は、人種隔離が必然的に不平等に至るゆえに、鉄道車両での人種隔離を規定したルイジアナ州法は法の下の平等を規定した憲法修正14条に抵触するという原告の主張を退け、次のように宣告した：

> 二つの人種の分離separationを強制することは黒人に劣等性の烙印を押すものであるとする原告の前提には根本的誤謬があるとわれわれは判断する。この前提が事実だとすれば、それはただ単に、黒人がそのような解釈(construction)することを自ら選択したからにほかならない[5]。

精神的苦痛の補償を求めようとするならば、被害者が人種主義的意図を立証しなくてはならないというのである。「人種隔離はそもそも本来的に不平等である」と断じてこの判例を覆し、公民権運動を鼓舞したブラウン判決が1954年、つまり人種主義の意味を決定するものの立ち位置は、一世紀以上のときを経て完全に一回転したのである。

「人種」とは社会的且つ歴史的な構築物であるという学問上の認識が拡まって久しい。現在「アフリカン・アメリカン」と総称される集団は、北米英語圏において、さまざまな呼称で示され、そして示してきた。かかる呼称の変転の歴史そのものが、「人種」の構築性を物語るものである。それと同時に、敵対的環境のなかで生きる空間を切り拓きつつ、人種主義の毒牙が身を滅ぼすことに抵抗してきた、アフリカ系の人びとの主体性と創造性を示している[6]。

ところで、その変転の歴史に関し、現在のアメリカで政治的妥当だと考えられている表現、African Americanという呼称が一般化したのは、1984年の大統領民主党予備選で予想外の大健闘した黒人候補ジェシー・ジャクソンJesse Jacksonが、黒人の人種的アイデンティティを覚醒させ、それを政治的動員しようと意図的に使ったときに始まる[7]。他方、ヒップホップの音楽表現に多大な影響を与えたR＆Bシンガー、ジェイムス・ブラウンJames Brownは、黒人に対する呼称に関して次のような興味深い意見を述べている：

> カラードとは、おどおどして生きるあまりに死にそうになっているアフロ・アメリカンのことを指す。ニグロとは世渡りが巧い奴で、白人になりたがっている奴のことだ。ニガーと言えば、騒々しくて粗暴、目立ちたがり屋。ブラック・マンには誇りがある。ブラック・マンは建設的で、自分の人種が何かしかのものになるように努力している奴だ。文化と芸術様式をもっている奴のことだ。それでいて偏見とは無縁な奴。俺は、そんなブラックなアメリカンだ[8]。

つまり黒人の呼称は、人種集団内部の差異を示すものとして、戦略的・選択的に使われるものなのであり、黒人の総称でないゆえに、その言葉の内実に迫ろうとするならば、社会政治的文脈からしか判断できない。ゴーデッリから「「Nから始まる言葉」についてどう思うか」と問われた黒人の陪審員候補のひとりは、「それは事情に拠ります、誰がその言葉を使い、どのように使ったかに拠るのです」と答えているが、それは故なきことではない[9]。

他方で、ヒップホップ・アーティストたちが「ニガー」という言葉を頻用し、その過程のなかで意味内容に何らかの変転があったのも事実であろう。1985年、ポピュラー音楽の歌詞に露骨な性描写や暴力的表現が用いられていることに危機感を感じたものたちが結成した団体――当時は連邦上院議員で後の副大統領アル・ゴアの夫人ティッパー・ゴアTipper Gore、現職の財務長官だったジェイムス・ベイカーの夫人スーザン・ベイカーSusan Bakerといった超党派で巨大な政治力をもった人びとが結成した団体――が、レコード会社の業界団体、アメリカ・レコード協会Recording Industry Association of Amerikaに、「人びとに不快感を与える」レコードの発売禁止を求めた。音楽に対し「検閲」が要求されるのはこれが初めてではないが、これを契機に協会は自己規制に乗り出し、社会的に問題があるとみなされるものにはParental Advisoryと記されたシールが貼られることになった（末尾、図1参照）。量販店のなかにはこのシールが貼付されている音楽ソフトの販売を禁止しているところもある[10]。ところが今日、ヒップホップにジャンルにわけされているＣＤには、ほぼ例外なくこのシールが貼られている。露骨な表現こそ、このジャンルのトレードマークなのだ。

既述の暴行事件は、一見したところ、懸念された「メディアの悪影響」が現実となったものと判断できよう。しかし、人びとは音楽を通じて初めて「ニガー」という言葉を知るわけではない。そして、この言葉は、黒人が黒人に対して使うときにのみ人種集団への帰属意識と同胞愛を示すものになるのであり、黒人とみなされてもいなければみなしてもいない人物が発するとなると事情は異なる。

ヒップホップ草創期の80年代中葉に起きたエピソードが、この事情をきわめて良く物語っている。この頃のヒップホップ・シーンに、ビースティ・ボーイズBeastie Boysというユニークなグループが登場してきた。ヒップホップ・グループのほぼ全てが黒人やラティーノから構成されていた当時にあって、このグループだけはメンバー3人全員が「ユダヤ系白人」だった[11]。そのような3人組が、「黒人音楽」の殿堂、ハーレムのアポロ・シアターで公演することになった。その模様を、一緒にステージに立った黒人のＤＪ[12]、ドクター・ドレーDr. Dreは、このように回顧している：

> そのときのみんなの態度はこんな感じだったかな。「いいか、何をやっても良いが、ニガーとだけは言うな」。その当時のヒップホップ・シーンで、この言葉を使っていたのは俺たちぐらいだったんだ。でもそれは生活の一部になっている言葉で、ネガティヴな意味なんかはなかったし、むしろオーディエンスへの思いやりとか親しみを伝える言葉だったんだ。でもラッセル[i]が俺の腕をつかんで、こう言ったんだ。「彼らだけには言わせちゃダメだ」。［中略］やがて彼ら［ビースティ・ボーイズ］がステージにあがって、ヒット曲の「シーズ・オン・イット」を歌い始め、［メンバーのひとり］アド・ロックAd-Rockがこう言ったんだ。「お前らニガー、聞こえるか、手を挙げて、振り回そう！ ］"All you niggers, wave your hands in the air!"。うつろな目をした人の顔をあんなにたくさん見たことなんてなかった。［中略］それでもアド・ロックは「さあ、みんな、どうしたんだ、みんな」なんてアジっていたんだけど、手を振るものなんていやしなかった。彼らは、その曲が終わると、マイクを放りだし、ステージから走って消えちまった。視線は残った俺に集中してしまったよ[13]。

つまり、「ニガー」という呼称は、人種集団内部の差異を示す徴であると同時にまた、人種を分かつ太くて明瞭な境界線でもあるのだ。

ここで筆者はどうやら険しく滑りやすい場に足を踏み入れたようである。いかに定義が曖昧で「科学的根拠」を欠く概念であろうとも、「黒人」という集団は生活世界のなかで厳然と存在し、その集団の内と外とでは使える言葉が異なる。とすれば、その集団の外部の属すると一般的に考えられるものの批評には、一定の許容範囲ならびに限界があることになろう[14]。したがって、「ニガー」という言葉の使用、「差別問題」の負荷が重くかった文化様式ヒップホップを、「黒人」以外のものが論じることにはそもそも道義倫理的責任問題があると言わざるを得ないのだ。「黒人」とみなされる集団の外に位置するものにとっては、人種主義的問題があるとするものを一括して非難し、共存共和をひたすら唱道する立場にいた方が、批判的に検討するよりもはるかに「安全」なのである。

ところが、任意の集団へのメンバーシップがないことが、その集団について語る場をも否定しまうとすれば、結局は「異文化」を研究すること自体が否定されてしまう。かつて日本では、「ちびくろサンボ」が一部のアメリカ黒人のあいだで「差別表現」だと捉えられていることを知った一家族の「善意」

---

i 「ラッセル」：ヒップホップ・シーンの先駆的レコード制作会社デフ・ジャム Def Jam の創業社長で黒人のラッセル・シモンズ Russell Simmons のこと。実弟はラップの楽曲の最初のメガヒットを生んだ Run-DMC のメンバーである。

による抗議行動が連邦議会黒人会派Congressional Black Caucusや南アフリカのアフリカ民族会議African National Congressをも動員した「国際問題」になったために、絵本の発売が一斉に自主規制されることがあった。約20年の時を閲して、いったん絶版になったものが復刻され、それでいて大きな抗議がない今日からこの時のことを考えてみると、差別表現への「敏感さ」が「異人種」「異民族」「異文化」の対話を促進したと少なくとも断定はできないことがわかる[15]。つまり、「安全」な場所に留まっていては、細分化された既存のアイデンティティの塹壕で暮らさざるを得なくなり、よりたいせつな対話が途絶えてしまうのである。本稿は、かかる危機意識に基づき、敢えてその険しく滑りやすい場を歩んでいく。そうしなくては、さまざまな社会的・政治的問題を抱えたヒップホップ・カルチャーの深層に迫ることはできないからであるし、さらに重要なことに、ヘイト・クライムに繋がる他者認識と豊かな文化交流との区別がつかなくなるからである。

ここまで述べたところで、筆者が抱えているいまひとつの概念操作上の問題点を述べておくのが適切であろう。多文化主義論争を考察したアメリカの思想史家デイヴィッド・A・ホリンガーDavid A. Hollingerは、この思潮が〈アイデンティティの政治〉の対立激化を招来し、結局のところ公共性に依拠した将来の社会の統合原理を提示することに失敗したと論じた。そのような彼が第一の批判の対象としたのが、多文化主義そのものではなく、現在のアメリカ政府公式の民族人種（エスノレイシャル）分類であり、その政治的分類への個人のアイデンティティの政治的囲い込みであった。民族人種のアイデンティティは先天的に決定されるものではなく、個人の意思に基づいて選択され、また取り消し可能なものでなくてはならない、というのが彼の持論である。多文化主義者を含めた多くの論者は暗々裏のうちに文化と民族人種を混同してしまっているのであって、「「文化」といいながら、実は「民族」や「人種」を指し」ているが、「文化について語りたいときには、人種はまったく役に立たない」のだ[17]。

多文化主義論争の思想理論面での考察は稿を改めるべき大きな主題であるゆえに、筆者はホリンガーの見解に基本的に同意するということのみをここで記しておきたい。それゆえ、たとえば、人種と文化を連ねて「黒人文化」といった表現を用いることには強い抵抗感がある。筆者はそもそも、ヒップホップはもとより、ジャズやブルーズ、ソウルも「黒人文化」であるとは考えていないし、「黒人ゲトーの文化」、「黒人ギャング」という表現を用いるとき、この言葉が明らかに邪悪なステレオタイプを喚起することも承知している。しかしながら、「アフリカ出身者かその子孫である人びと」を指示対象とする日常言語がない以上、問題が多いとは認めつつもこのような表現を使わざるを得ない[18]。後述するように、人種カテゴリーがアメリカ社会を説明する有効な指標として機能し続けているかぎり、それを完全に閉却すると、また別種の政治的問題を抱え込んでしまうのである。

いささか前景と後景の説明が長くなったが、本稿の目的をここで明確にしておこう。ヒップホップは、脱工業化した都市中央部（インナー・シティ）で誕生した文化である。本稿は、誕生からおよそ四半世紀が経過したヒップホップがたどった軌跡を確認し、この文化の状況依存的偶発性（コンティンジェンシー）を考察するものである。そうすることで、ポスト公民権時代の〈人種の政治〉の断線を明らかにし、今日的「人種」の布置情況を解明することを目的とする。第1節では、黒人の青少年の行動様式を痛烈に批判したあるエンターテイナーの演説内容を紹介しつつ、今日のブラック・アメリカに存在する世代間の社会認識の懸隔を論じる[19]。第2節では、大衆文化とみられるヒップホップと黒人急進主義の意外な関係性を跡づける。第3節は、ストリート・ギャングに実際に所属したか、所属していたものとの関係をもつ人びとが始めたヒップホップのサブジャンル、「ギャングスタ・ラップ」の実践者たちが直面している環境、わけてもアメリカの刑務制度との関係を論じ、「人種」を語ることの問題域（プロブレマティーク）を考察する。

本稿は、また、太く厚い「人種の境界」の断線によって囲み込まれた政治的秩序が攪乱され、「人種」のカテゴリーを超越した文化様式が現れる模様を、ヒップホップのイマジネーションに焦点を当てて描出しようとするものでもある。実証面において構築されたカテゴリーを用いて、構築性を超える現象を語ろうとすること、このことの論理的・手続的問題点は強く自覚してはいるが、現在が構築性を超越する過渡期にある（そして筆者に想像力が不足している）以上、「際どい手法」を用いざるを得ない。読者の方々のご批判を頂ければ幸甚である。結論を先取りして述べれば、今日のヒップホップをめぐるさまざまな「事件」や「論争」にはポスト公民権時代のアメリカの人種間ならびに人種内の社会政治問題の諸相が色濃く映し出されており、アメリカの主流の感性に挑戦しつづけるヒップホップの表現の政治性のなかに、「人種」をめぐる批判理論が落ちた陥穽から這い上がる契機がある、ということである[20]。

## 1．ビル・コスビー演説解題：〈公民権世代〉対〈ヒップホップ世代〉

2004年5月はブラウン判決から半世紀が経過にあたる。しかしながら、肝心のアメリカの公立学校における人種統合は、70年代に一定の進展は見られたものの、90年代に入るとその流れが逆転した。今日では、人種統合を目的にした行政施策（バス強制通学やアファーマティヴ・アクションなど）は、黒人などのマイノリティを「優遇」することで逆に「法の下の平等」に抵触しているとする訴訟の対象になったり、さらには住民投票などの「民主的手続」で禁止されたりで大きな転換点を迎え、これらの施策を維持・推進しようとするものたちは守勢に立たされている。ブラウン判決や公民権運動が黒人の地位向上に何の貢献もしなかったとするのは単なる極論にすぎないが、同判決後の半世紀がアフリカン・アメリカンという集団とっては両義的なものであることにはまちがいない。法的障壁を破壊した公民権運動の結果、かつてない速度で黒人の上・中流階層が増加する一方、人種を考慮に入れた積極的施策なくしては現状を打開できない層――社会学者ウィリアム・J・ウィルソンがいう「真に不利な情況に置かれたものたち」――も依然として存在しているのである。

この事情に関し、経済史家のマイケル・B・カッツMichael B. Katzらは、ポスト公民権時代の情況を奴隷解放以後の黒人の歴史総体のなかに位置づけ、「黒人ミドルクラスの興隆とする表現よりも、分極化differentiationの方が、その変化を物語るより精確で客観的もの」であり、黒人の体験を、ジェンダーや階層classによって、（再）分節化disaggregateすることが必要だと主張している[21]。「黒人ミドルクラスの興隆」という規定は、積極的変化を強調する一方、「真に不利な情況に置かれたものたち」の存在を等閑視する。ところが、アメリカ社会全体でミドルクラスとみなされる集団に、黒人の過半数以上が属することになったことは歴史上一度もなく、逆に今日ですら貧困層に属する黒人の率は全体の約４分の１（白人のケースの3倍）にまで達するのである[22]。ポスト公民権時代の変化が両義的であるという所以である。

次に詳述する「事件」は、その両義性をまざまざと開示するものである。それはほかならぬ、人種統合の理念の実現にするために長く地道な闘争を続け、ブラウン判決の原告の弁護を担当した全国黒人向上協会(the National Association for the Advancement of Colored People、NAACP)と「黒人大学」の名門校ハワード大学が主催する「記念集会」で起きた。その集会で、「黒人指導者」や訴訟に実際に関係したものたちの講演が終わったあと、70年代から80年代にかけて幅広い人気を獲得したコメディアン、ビル・コスビーBill Cosbyが演壇に立った。彼は、「黒人コメディアン」のなかでも、献身的公民権運動家でもあったディック・グレゴリーDick Gregoryや、同世代のリチャード・プライヤーRichard Pryorと較

べると、稀にしか人種を笑いのテーマにしなかった。そのような経歴とは対蹠的に、ここでの彼は腹蔵なく人種について語った。そこで、若干の社会政治的そして歴史的背景の説明や実証的批判を加えながら、その内容を考察してみる[23]。

コスビーは演説が始まってすぐに、次のように辛辣な批判を切り出した：

> 紳士・淑女のみなさん、彼ら［NAACPの活動家］が模範を示し、ドアを開けてくれたのです、権利を与えてくれたのはその人たちです。でも、今日、紳士、淑女のみなさん、都市部の学校で、われわれの子供の中退者の率は50%になっちまっている。むかし近所にいた野郎といえば、いまは刑務所にいる始末。亭主がいないのに妊娠、それを恥ずかしいと思う奴なんてもういやしない。それでもって、男の方と言えば、子供を産ませておいて、親の責任からは逃げ回っていやがる[24]。

この主張は、ある社会が「崩壊」の過程にあると認識されたとき、ほぼ普遍的に見聞きされる「家庭の崩壊」を嘆く声である。だが、具体的に言及されている現象、高率の高校中退者、増加する「非嫡出児」の出産や受刑者の数は、すべてステレオタイプ化された形で「黒人問題」と呼ばれるものだ。では、近年のこれらの「問題」はいかに推移したであろうか。はっきりとした悪化傾向が認められるのであろうか。

政策立案のために連邦議会ならびに連邦教育省に対して調査報告を行う政府機関、全国教育統計センター(National Center for Educational Statistic)が発表した最新の報告書によると、2004年の時点で、16歳から24歳までの非ラティーノ系黒人[25]のなかで高校に通っていなければ卒業してもいないものの率は、50%どころか、11.8%である。白人の場合は確かに6.8%とこれより低率ではある。しかし、経年的推移をみてみると、その率は、1975年の22.9%を頂点に、部分的例外を除き一貫して低下傾向にある。70年代と較べるならば、それは実に半減しているのである[26]。もとよりこの統計数値は、都市部・農村部の区別を捨象したものであり、1995年学制年度においてある都市での中退者率は31%の高率に達しているという事実も報告されてはいる[27]。しかし、この高率には、地理的環境――インナー・シティのゲトー――を地に人種という図が覆被（スーパーインポーズ）しているということを認識するのが肝心であろう。コスビーの演説は、人種化された地政上の条件と低い教育レベルの連想が成立した後に意味を成すものである。

次に若年出産をみてみよう。2004年の時点で、アメリカでは義務教育を受ける年齢にあたる15歳から17歳までの出産率は、黒人の場合、人口1000人あたりに対し36.8である。これは、確かに、アメリカの平均、22.1に較べるとかなりの高率である。しかし、1991年にこの率が86.1であったことと較べるならば、これも経年的には情況は悪化しているどころか、著しく改善しているのである[28]。

このようにコスビーの非難が黒人全体を指しているものとしては低い実証性しかないならば、彼は誰をそして何を非難の対象としているのだろうか。それは、この演説のなかで、すぐに明らかになる。少々長くなるが、その長さが彼の心情を示しているゆえに、以下に引用する。コスビー曰く：

> 紳士、淑女のみなさん、経済的に中流の下や下層のものたちは責任感なんてないんです。われわれが小さい頃を過ごしたところだって、もう子育てができる状態じゃない。俺がここで話している人間は、囚人服を着てしまったわが子を見た途端にわめき散らし始める奴らのことなんです。こう言いたいね、あんた、その子が2歳の時に、いったいどこにいたんだ、って。子供が中学生になった頃、いったいどこにいたんだ。息子が高校を卒業する歳になったとき、いったいどこにずらかって

いたんだ。そんなことだから、息子がピストルをもち歩き始めても、全然気がつかないんだよ。

［中略］ほらムショに放り込まれている奴らを見てみろ。あいつらは政治犯なんかじゃねぇぞ。あいつらはコーラを盗んでパクられたんだ。警官にアタマぶち抜かれたのも、けちくさく一箇のパウンドケーキを万引きしようとしたからなんだ。それでも黒人ときたら、怒って外に出て、銃を撃つなんてひどいとか言ってやがる。おいちょっと待て。撃たれた奴、最期に片手で握りしめていたのはパウンドケーキなんだぜ。そんなに旨いケーキなら喰ってみたいもんだ。

おい、みんな気づいていないのか、そこらにいるヘンな奴らに。帽子を後ろ前に被り、ベルトをケツのところにしている野郎に。あいつらは誰かの使者なのか？あんたらは、イエス様がやってきて、そいつパンツを引きあげてくれるのを祈っているんだろう？おいおい、女ときたら、スカートをケツのところまであげて、体中にピアスやら針やらを刺しまくっている。いったいそれはアフリカのどこの伝統なんだ。われわれはそもそもアフリカ人やないだろっ。アイツらだってアフリカのことなんかこれっぽちも知っちゃいない。それでも名前だけはアフリカ風。何だって？シャニクア、シャリンガ、モハメド、ほにゃららら。でもこいつらみんなムショに行くことになっているんだ。

［中略］もう人種隔離の問題は白人の責任じゃないんだ。俺たちのコミュニティを俺たちの手に取り戻そうじゃないか。［中略］問題は、そこの交差点に立っているじゃないか。まともな言葉遣いができない奴がたくさん立っているじゃないか。まともな言葉をしゃべろうともしない奴が。おっと、奴らの真似をしようとしてもそんなに簡単にできやしない。Why you ain't where you is go, ra. お前、いったい誰なんだ？！

ブラウン判決、かつて人びとはデモ行進をしては、アタマ目がけて石を投げつけられ、顔をぶん殴られていた。それもこれも教育を得るためだ。それでもっていま現れてしまったのはまともな言葉でしゃべろうとしないバカタレ。うろついているばかりで、話し方すら学ぼうとしない。俺が何のことを話しているのかわかるだろう、みんな。なぁ、怒るときにはしっかり怒ろうじゃないか。白人は笑ってる。笑って当然だろ。高校中退率50%、残りの50%はムショのなか[29]

強烈な罵詈雑言である。

さて、ここで彼が非難の標的にしているのは、「経済的に中流の下や下層のものたち」、一時期「アンダークラス」という名前で総称された人びとである。さらに正確を期すれば、「アンダークラス」の環境ではなく、彼ら彼女らの行動様式である。「われわれが小さい頃を過ごしたところ」という表現からわかるように、この場で笑いを共有したものは、今はこの「アンダークラス」が置かれた空間の外部にいる。

そして、引用部後段の「俺たち」という表現で、テーマは公民権運動期の英雄的行為への接続され、それを準拠枠に若いブラック・アメリカが批判される。「そこらにいるヘンな奴ら」の言動は、今日ヒップホップ・カルチャーを通じて、世界中で流行し始めたものである。アンダーウェアが見えるほどズボンを下げて身につける流行は、ギャングスタ・ラッパーのスタイルが起源であり、そもそもそれは刑務所での慣行であった[30]。コスビーがここで刑務所に言及しているのはそのためである（曰く「わたしが何のことを話しているのかわかるだろう、みんな」）。

ブラウン判決50周年記念集会、人びとがここで「笑い」を共有したとき、階層によって、住む場所によって、そして世代によって「黒人」を分かつ線が引かれ、ブラック・アメリカは自らを（再）分節化した。コスビーの演説は、ポスト公民権時代の「黒人」の情況の両義性を浮き立たさせたのである。

ヒップホップに対し、このような辛辣な批判がある一方、それへの称賛を惜しまないものもいる。たとえば、「ヒップホップ世代」を自任する歴史家のトッド・ボイドTodd Boydの見立てによると事情はこうなる：

> 公民権運動についてのゴタクcivil rights shitはとにかく重い。今日の社会では何の役にも立たない。現在となっては、アファーマティヴ・アクションは過去の失策、人種をテーマにした話題はまったくのタブー、人口の比率は日々変化、公民権運動の時代は終わったのだ。［中略］ブラック・コミュニティが直面している問題とは、〈公民権運動世代〉と〈ヒップホップ世代〉とのあいだのジェネレーション・ギャップなのである[31]。

彼にとって、「今日の問題」の淵源は、青少年の行動様式ではなく、公民権世代の失敗に求められるものなのだ。

また、世代的には両者のあいだに立つ黒人の音楽ライターであり社会評論家でもあるネルソン・ジョージNelson Georgeは、二つの世代のどちらにも明確に与することなく、このあいだの事実の経過をグラフィカルにこう描出している：

> B-Boy（とB-Girls）、ヒップホップの第一世代はほとんどが黒人かヒスパニックだった。ポストソウル第一世代だ。この名称でわたしが示したいのは、アメリカン・ドリーム実現の妨害のために存在していた赤裸々な壁が崩れ落ちた後に成長したものたちのことである。現在黒人はどこにいようとも投票権をもっているし、人種統合された学校に通うことすらできる。なかには新しいコミュニティに移住し、出世街道を進んでいるものもいる。これまでのアメリカ史を通じて見られてきたマイノリティの人間に独特な心理状態とは異なった心持ちで将来へと突き進んでいるものもいる。まちがいなく古い壁は壊された、しかし、盛んに喧伝された「虹の未来」には、かつての壁が姿を変えて、いわく言い難いものとして現れた。ポストソウルの少年たちはベトナム戦争の時代に育った。彼らの父親は、戦地からドラッグや、そして潰えたアメリカン・ドリームとともに帰還してきた——それでも戻ってくればまだ良かった。彼らの成長と同時に、黒人のなかでは中層と下層階級との格差が増大した。彼らは、ウォール・ストリート流の貪欲さと、保守主義のイデオロギー、アタリのゲームボーイ、クラック・コカイン、エイズ、アフロセントリシティとともに育ち、そのなかで、マルコムX Malcolm Xの姿は、映画のヒーロー、政治的イコン、マーケッティング・ツールのすべてを表すようになった。彼らはネルソン・マンデラが監獄から歩み出る様を見ると同時に、マイク・タイソンが別の監獄へ入って行くのを見たのである[32]。

ヒップホップを理解するときには、この地景をみつめることが重要だ。なぜならば、ヒップホップに対する評価は、その文化の内容よりも、黒人社会ならびに現代アメリカでの黒人のポジション、黒人が歩んできた歴史への解釈等々の複合的な要素に深く関係した重層的で社会政治的判断であるからだ[33]。

## 2．ハイパーリアルな黒人急進主義

本節では、そこで、ヒップホップの軌跡を、わけても多くの政治的論争を起こした当事者の証言にしたがってあらためてたどってみる。一般に流布しているイメージと異なり、ヒップホップ文化のルーツは、アフリカン・アメリカン文化のみではなく、1970年代のアメリカのインナー・シティ、アフリカン・カリビアンやラティーノを含む人種民族的な多様性に富む環境に存在していた。つまり、ヒップホップは、「多文化主義」という言葉が人口に膾炙する以前に、「多文化主義」を体現して生まれものだと言える[34]。

歴史家であり文芸評論家のトリーシャ・ローズTricia Roseは、ラップ・ミュージックが表現しているのは、「黒人の都市生活の鼓動、悦楽、そして苦悩」であると論じている（「黒人」という人種上の限定規定に留保をつければ、筆者もこの見解に同意する）[35]。このなかで〈公民権世代〉の憤怒の対象になっているのは「苦悩」を表現するスタイルである。

1968年、キング牧師が暗殺された年であり、ブラック・パワー運動の最盛期でもあるこの年に結成され、その後のヒップホップ・グループの祖型となったとしばしば指摘されるラスト・ポエッツLast Poetsの初期の曲で最も耳に残るフレーズは、奇しくも、「ニガーは革命を恐れている」“Nigger's Afraid of Revolution”である。60年代のハーレムの文芸運動のなかから生まれたこのグループは、当時はまだ彼らにとって身近（イミーディエイト）な存在だったマルコムXの思想に直接影響を受け、革命を望む黒人を「ブラック」、（公民権運動穏健派を含む）体制に順応する黒人を「ニガー」と規定した。さらにはまた、ラッセル・シモンズは、70年代の黒人の口承文化の有り様と、主流の政治文化に包摂され得ない政治的思想体系の伝播の模様を生き生きと描写しつつ、こうヒップホップの歴史を語っている[36]。

> 影響の大きさにもかかわらず、ヒップホップの歴史を語るときに忘れ去られているものはかなりある。そのなかのひとつが、〈ファイヴ・パーセント・ネイション・オヴ・ゴッズ・アンド・アーシーズthe Five Percent Nation of Gods and Earths〉である。ファイヴ・パーセント信者たちは、ニューヨーク出身の黒人受刑囚がいる刑務所で成長した宗教に入信したものたちだ。このように言えば良いだろうか。ネイション・オヴ・イスラームNation of Islam［以下、NOI］が刑務所にいる人びとから改宗者を募ったとすれば、ファイヴ・パーセントは刑務所の陰のもとで改宗者を得ていったものだ。［中略］黒人こそが神であり、なかでもその5%だけがほんとうの自己認識をもっているという思想に拠って立ち、当時の若い黒人が集まるとことではかなり強い影響力をもっていた。［後略］
>
> 機転が利き、口が達者で、狡猾なニガNiggaたちがこの宗教に惹きつけられていった。というのも、ファイヴ・パーセント信者たちの宗教心の篤さは厳格な信条箇条を口で表現するその巧妙さに顕れる、とされていたからである。［中略］その話し方がまた巧妙だったから、人びとはそれに完全に魅せられていった！［中略］“knowledge me”、“true mathematics”、“360 degrees of knowledge”、“dropping science”といったヒップホップの語彙は、ファイヴ・パーセント信者たちの言語力に拠るところが大きい。
>
> ［中略］ブルックリンやクイーンズブリッジ地区の公共住宅出身のラッパーたちを聴いてみると良い。韻を踏んで語っているのはファイヴ・パーセント信者にほかならない[37]。

このような黒人の急進的思想と強い関係性をもっていたヒップホップのサブジャンルは、都市の情況を

写実的に描いたために「リアリティ・ラップ」、さらにまた強い人種意識に依拠しているためにコンシャスネス・ラップとも呼ばれた（後述するギャングスタ・ラップの先駆者である）。80年代半ばに擡頭したこのサブジャンルの代表として挙げられるのが、シモンズのレコード会社に所属していたパブリック・エネミーPublic Enemy（以下、PE）である。

PEは、強い政治性を帯びたメッセージゆえに、そしてまたメンバーの言動ゆえに、1980年代後半から1990年代にかけてのブラック・ナショナリズム再興への「導火線」であると言われることがある。NOIの最高指導者ルイス・ファラカンLouis FarrakhanとPEのアメリカの公衆一般のなかでの認知度は軌を一にして上昇した。ファラカンがしばしば「反ユダヤ主義者」として非難されたならば、PEもまた同じ批判を受け、メンバーの一人、プロフェッサー・グリフProfessor GriffはNOIの教義の熱心な信徒であった。さらにこのグループは、ブラック・パワー運動を担った諸組織のなかでも最も強い影響力をもっていた団体、ブラック・パンサー党Black Panther Party for Self Defense（以下、BPP）のイメージを戦略的に展開した。グリフは楽器を奏でるわけでもなければ、ラップをするわけでもなく、グループのなかでは広報を担当し、その役割を「情報大臣」Minister of Informationと名乗った。これは、獄中で著した手記がベストセラーになり、60年代を代表する黒人知識人になったエルドリッジ・クリーヴァーEldridge Cleaverが「影の内閣」を組織していたBPPで実際に担った職である。

その後の黒人の監督によるハリウッド映画『マルコムX』、『パンサー』、さらにはアカデミー作品賞『フォレスト・ガンプ』や同候補作『アリ』に見られるように、60年代の黒人急進主義のイメージが大衆文化の世界に、基本的にはシミュラークルやノスタルジアとして登場してきたことには大きな社会的・政治的問題が潜む[38]。PEの登場をもってして「黒人急進主義の伝統の復活」と簡単に断じることはできない。ところが一方で、PEが自らの政治性・社会性に自覚的であったのもまた事実である。グループのリーダー、チャックD Chuck Dは、政治的主体性が「悦楽」の陰から姿を現す過程を次のように炳然と認識している：

> 〈パブリック・エネミー〉という名前を決めたあと、その政治社会的意味がはっきりしてきた。なぜならば、その名は、当時の俺たちの存在や意味やその社会的な連関とぴったりきたからだ。合衆国憲法では、黒人男女は、人間の5分の3であるとみなされている。政府や一般大衆が奉じるのがその憲法であるならば、俺たちは彼らの敵であるにちがいない。
>
> 俺たちがシンボルとなっているのは、BPPとNOI双方に原点をもつ、ナショナリズム、自律性（セルフ・エンパワーメント）、戦闘性、これらすべてなのである[39]。

そのようなチャックDは、1960年に生まれ、政治家や運動家の暗殺、人種暴動、さらには警官殺害の冤罪に問われたパンサー党防衛大臣ヒューイ・ニュートンHuey P. Newton釈放運動に参加し、彼の自由を求めるシュプレヒコールを連呼した経験をはっきりと記憶しているのであった[40]。

ところが、PEの表象を詳細に吟味してみると、一般大衆のヒップホップに対する心像（イマジャリー）とリアリティとに乖離があることが明らかになる。末尾図2はPEのアルバム『俺たちを止めようとするなら国民大勢でかかってこい』*It Takes a Nation of Millions to Hold Us Back*のジャケットである。グループの中心メンバーの2人、チャックDとフレイヴァー・ファヴFlavor Favの前にあるのは牢獄の格子である。ヒップホップは、当時も現在も、犯罪との関係が指摘され、そしてそう「連想」されてきている。ところが、チャックDに犯罪歴はなく、このグループ自体、ニューヨーク市郊外のロング・アイランドにある大学

生を中心に結成されたものであった。そのような彼らと契約していたシモンズは、興味深いことに、次のような言葉を残している：

> わたしは、アメリカの都市に存在している怒り、流行、攻撃性、ポリシーを、世界中の音楽ファンに対して売り込むことに、これまでの人生を費やしてきた。アーティストの素質をもったものを発見し、育成し、プロモートし、高いレベルの芸術性を備えた商品にして売り出すことを支援し続けてきたのだ。［中略］多くの人びとの手助けがあってのことでもあるが、わたしは、一銭にもならなかったヒップホップのビジネスを、数十億ドル規模の大産業に成長させたのである[41]。

彼は怒りすらも商品に変えられ得ると大胆に断言している。つまり、ヒップホップの人気の高騰と同時に進行したのは、「心像としての黒人ゲトー」の商品化なのであった。そして、80年代後半から90年代にかけてギャングスタ・ラップが擡頭してくることになると、その「商品」の消費者の大多数が白人になっていったのである[42]。

そのようなヒップホップ・アーティストの合い言葉は、「リアルに行こうぜ」Keepin'It Realだった[43]。彼らの楽曲のテーマは、ローズの言う「黒人の都市生活の苦悩」である。しかしながら、それは商品化のプロセスを既に通過したものにほかならない。心像が商品に転化し、多様に「消費」されること、その点において、この文化の交流は極めて後期資本主義的、ポストモダン的現象であり、その内実はボードリヤールらが言う「増幅されたリアリティ」、「ハイパーリアリティ」と呼ぶものである。黒人急進主義はサウンドバイトに変化しているのだ。いわゆる「アルファー・ワールド・シティ」のエリートたちとともに、都市の「黒人」たち、身体性を具備したものたち自身が「リアリティを増幅」し、幻想を輻射しているのである。

それはこう表現できるであろう。ヒップホップのイマジネーションのなかに現れる「ニガー」は遺棄された都市空間の多様性が育んだ戦略的本質主義者である。ここに既存の秩序が攪乱されるモメントがある。チャックDの言葉を聞いてみよう：

> 自分が置かれた情況について大声で語ること、それがこの国で黒人の男に許されたことはなかった。ところが、マルコムXのような人物が300人出現、それがいま起きていることだ。それはカオスと無秩序の海のなかで歪められてはいる、しかし、大声で怒鳴りあげ、叫び続け、そうして耳を傾けられているだけでなく、支持者を集めているんだ。問題は、自分自身が置かれている環境やリアリティをコントロールできないとすれば、ファンタジーとリアリティの境目が曖昧になることだ。アートが生活のイミテーションであるのではなく、生活がアートのイミテーションになるのはシリアスな事態だ。しかしそれが起きてしまっていて、いまのアートは、写し絵であると同時に指令でもあるんだ[44]。［傍点、筆者］

この模様の問題域は、「シャニクア」でも「シャリンガ」でもなく、今日最も広く知られているギャングスタ・ラッパー、トゥパック・アマル・シャクールTupac Amaru Shakurの生涯を追ってみるとさらに鮮明になる[45]。

2Pacの母、アフェニ・シャクールAfeni Shakurは、BPPニューヨーク支部創設者の一人であり、ブロンクス植物園とニューヨーク市地下鉄爆破未遂でパンサー党員21名が逮捕・起訴された冤罪事件に巻き

込まれたものの一人でもある[46]。2Pacが誕生したのは彼女が釈放されたわずか1か月後のことである。70年代初頭の彼女は、「政治犯」としての弾圧を経験したものとして、全米各地の人権団体や学生団体主催の集会で人気の講演者だった。しかし、アメリカ社会の支配的ムードが保守的になるにつれて彼女の生活も苦しくなり、やがてはクラック・コカイン中毒や福祉依存といった、「都市ゲトーの問題」のなかで暮らさざるを得なくなった。一方、ハーレムの劇団に所属していた幼い頃の2Pacは、1983年、アポロ・シアターで行われた公演で、ジェシー・ジャクソンを前に、黒人文学のカノンのひとつ、「レーズン・イン・ザ・サン」*A Raisin' in the Sun*の主人公を演じるほどだった。その後の彼は、演劇界でキャリアを追求するために、メリーランド州ボルチモアのマグネットスクール、ボルチモア芸術学校に進学し、クラシック・バレーから音楽に至る教育を受けることになった。しかしながら、家庭環境の悪化のため、そこでの勉学を続けることはできず、親戚知己を頼ってサンフランシスコの北にある小さな町、マリン・シティに移住することになった[47]。

その後、ほんの短期間だが違法薬物販売などの触法行為にも従事したのであるが、やがてローカルなヒップホップ・シーンで頭角を現していった。1991年11月、*2Pacalypse Now*と題したアルバムでデビューを果たすと、1996年に非業の死を遂げるまで一貫してヒットチャートの上位に位置し続けた[48]。死後10年が経過した今日も、彼の「未発表録音」やいわゆる海賊版の発売は後を絶つ兆しがまったく見えない。2003年、『フォーブス』誌は、「死後になって資産を築いた有名人」の第8位に彼を位置づけ、『ニューヨーク・タイムズ』紙は、そのような彼の人気を（死後も人気が衰えないという意味で）「プレスリーに匹敵する」と評している[49]。

しかし音楽ビジネスでの成功と同時に、彼は、ある時には加害者として、ある時には被害者として、そしてまたある時にはスケープゴートとして様々な事件に関係することになった。1992年4月11日、テキサス州交通警察を狙撃した黒人青年が、狙撃の動機を2Pacの歌詞に鼓舞されたからだと主張する事件が起きた。大統領選挙のこの年、民主・共和両陣営がラップへの批判を繰り広げるなか、副大統領ダン・クエールDan Quayleは、2Pacのような人物は「われわれの社会が存在することを許さない」と非難した[50]。また、ロサンゼルスでロドニー・キング殴打事件が起き、アメリカ中の関心が警官暴力に集まっていたとき、彼自身もオークランドで警官から暴行を受けたこともあった。そして、1993年、19歳の女性から性的虐待と受けたと告発され、人気の絶頂にあった1995年2月に有罪が確定、ニューヨーク州の刑務所に収監されることになる[51]。

彼は、この受刑中にギャングスタ・ラップのレーベルとして頭角を現していたデス・ロウ・レコーズDeath Row Recordsと契約を結び、仮保釈後はそのレーベルの代表的アーティストとして活躍することになる。ところでデス・ロウとは「死刑囚を収監した刑務棟」の意である。つまり、このレーベルの名称自体が、犯罪性、都市ゲトー、ギャングといった世界とヒップホップ・シーンとを繋げる心像を創り出すものであり、且つまた、創業者で最高経営責任者のマリオン・シュグ・ナイトMarion Suge Knightを始め、同社に所属する多くのものが、〈ブラッズBloods〉というストリート・ギャングの実際のメンバーであった。以前からアメリカ社会の欺瞞性を指弾しつつ、その規範を転覆させ、「極道渡世」thug lifeを黒人の歩むべき道だと語っていた2Pacに、デス・ロウ・レコードが「極道」としての真正性（オーセンティシティ）を賦与したのである。

1996年6月、そのような2Pacは、「ぶん殴れ！ “Hit'Em Up!”」という暴力的な内容の曲を発表した。これによって、ギャングスタ・ラップの想像世界は現実のギャング抗争の現実世界と重なりあっていくことになる。この前の年のニューヨーク市で、彼は、同じく当時人気の絶頂にあったギャングスタ・ラ

ッパー、ノトーリアスB.I.G. Notorious B.IG.が録音をしていたスタジオを訪れた。ところが、スタジオの入り口で、彼は何ものかに狙撃され重傷を負ってしまった。ノトーリアスB.I.G.は、以前、〈ブラッズ〉と敵対していたストリート・ギャング、〈クリップスCrips〉に所属していたことがある。そこで「ぶん殴れ」は〈クリップス〉に対する「反撃」の表明、「戦線布告」であると解釈され、実際に歌詞で名指しで罵倒されたノトーリアスB.I.G.も公衆の面前で怒りを隠さなかった[52]。そして同曲が発表されて3か月後、2Pacは、ラス・ヴェガスの交差点で、走行中の車からの銃の乱射に巻き込まれて殺害されることになった。他方のノトーリアスB.I.G.も、翌年3月、ロサンゼルスで銃殺されることになる。これら一連の事件に関し、今日に至るまで一人も容疑者は逮捕されていない[53]。

おそらく上述の模様は、シリアスな論考に適さないようなカリカチュアかもしれない。しかしながら、これが実際に起きたことこそが、ハイパーリアリティなのである。ハイパーリアルな街の代表としてしばしば論じられるラス・ヴェガスとロサンゼルスで、この一連の事件が起きたこと、それは偶然だとは思えない。

## 3．社会批評としてのギャングスタ・ラップ：Beyond the Confine of Middle America

ここで、〈公民権世代〉の感性が〈ヒップホップ世代〉の感性とどこで衝突するのか、その具体像が明らかになってきたであろう。コスビーはこう言っている。「ほらムショに放り込まれている奴らを見てみろ。あいつらは政治犯なんかじゃねぇぞ」。この意見の対立の構図は、重要なことに、60年代後半期の黒人の運動をめぐる評価と酷似している。

人種統合を目標にしてきた黒人の運動は、1965年のロサンゼルス・ワッツ暴動以後、運動の再定義を迫られた。そのとき、青年を中心に急進化した一派は、「ブラック・パワー」をスローガンとする人種意識の覚醒や「第三世界」との連帯を強調し、アメリカン・リベラリズムに冷笑的態度をとり始めた。世界各地の60年代の社会政治運動で相同的に見られるように、前半期の運動のキャッチワードが「改革」ならば、後半期のそれは「革命」になった。2Pacの母親が所属していたBPPは、この急進派の先頭に立ち、毀誉褒貶の激しい史的評価の只中にある。「黒人コミュニティ」が公民権運動に動員されて行く過程では、政治的意識と人種的意識双方の覚醒が必要だった。そのような過程を通過するなか、通常の政治プロセスから排除されていた人びとも政治化されていった。ストリート・ギャングのメンバーが、公民権運動の影響を受け、BPPに見られるような「革命的ナショナリスト」へと変貌したという例は決して少なくない。そしてかかる過程に自己変革の可能性と進歩的政治勢力形成の可能性を見るものは多い[54]。他方、60年代にニューレフトの論客として活動しつつも、その後新保守主義者へと変貌したデイヴィッド・ホロウィッツDavid Horowitzなどは、「BPPの出自はストリート・ギャングであり、その本性は一度も変わったことがなかった」と断罪している。パンサー党を初め、ニューレフトとは、今の彼にしてみれば、「破壊衝動をもった世代」以外のものではないのである[55]。

ギャングスタ・ラップは、「現実をリアルに表現している」とその革新性が評価されもすれば、「暴力を美化している」とその写実性が非難されてもいる。ゲトーの暴力を歌詞のテーマにすることがそもそも両義的なものであろう。さらに言えば、ラップ・アーティストの多くが、反社会的活動と関係をもち、粗暴な言葉を用いる、つまり「逸脱した行為」をとることにも、社会政治性の真剣さが疑われかねない要因がある。

しかし、主流を自任するアメリカが普遍的と信じていた礼節decencyや体面respectabilityに人種性や

階級性、恣意と欺瞞を見つけたことこそ、60年代の社会運動・政治運動がたどりついた場であり、黒人の運動はその流れの先頭に立っていた（この「時代精神」の象徴は、おそらくキング牧師ではなく、モハメド・アリMuhammad Aliであろう）。つまり、ヒップホップに対する評価は、2Pacが「パンサー党員直系卑属」であることとは別の次元で、60年代後半のラディカリズムとの評価と相似形を描き、アメリカにおける「価値をめぐる政治」、「文化戦争」の一要素となっているのだ。

このようなポスト公民権の時代にあって、主流社会の規範を疑わなくてはならない根拠が、ヒップホップ・アーティストたちの生きる世界には存在し続けている。「真に不利な情況に置かれたものたち」の立場から見た地景のなかで、ギャングスタ・ラップの歌詞は精巧な実写（ドキュメンタリー）であり、彼らの行動様式はその社会への真剣な論評（コメンタリー）であるのだ。

コスビーは前述の引用部の後半で刑事罰受刑者に言及しているが、ではこの部分を接点にインナー・シティへ入ってみよう[56]。社会学者のロイク・ワカントLoïc Wacquantは、1968年以後のアメリカ黒人社会を、「継続して存在しているゲトーの暗闇と監獄制度とから形成された新奇で複雑な制度」と語り、そこでは監獄とゲトーとが「構造的に共存」し「機能的に代替可能」になっていると規定している。そしてアメリカ黒人の歴史は、「自由を獲得するに至った奴隷の話」ではなく、「解放された末に行く先が監獄になる話」と論じる[57]。アメリカにおける刑務所人口は、「ドラッグとの戦争」が宣告された1980年以後急増し（末尾グラフ１参照）、21世紀になると、世界で最高の投獄率と最多の実数に達することになった。なかでも黒人の受刑者数は人口の比率に不釣り合いに多い。刑務制度の問題点を調査し、法曹界関係者や刑務行政関係者に資料提供を行っているNPO、センテンシング・プロジェクトSentencing Projectが連邦議会の公聴会で提出したリポートによると、アメリカの総人口に占める黒人の比率が12%前後であるのに対し、1999年の受刑者数総数に対する黒人のそれは49%にのぼる（末尾、グラフ２参照）[58]。

この数値は、黒人コミュニティに対する影響の文脈から考えると、深刻さがさらに増す。2Pacが獄中にいた年と同じ1995年、刑務所もしくは留置所で拘禁されるか、仮釈放か執行猶予等々、何らかの形で「刑事罰に服しているもの」の率は、黒人全体の7%に当たり、これは白人の場合の約６倍である。さらに、20歳から29歳の年齢層（つまり〈ヒップホップ世代〉）の場合、この割合は、32%、３人に１人という異常な数値に達する。実数にして約83万人のこの人口は、高等教育機関に在籍している黒人の数の２倍に達しようとしている[59]。その結果、このリポートを報じるあるアメリカの地方紙は「逮捕された世代」と見出しを打つに至った[60]。

ここで既出のカッツらの議論を踏まえると、黒人の失業率等々、公式の記録が黒人の社会経済的環境の改善を示すからこそなおさら、その環境から排除される巨大な人口の存在がより深刻な問題になると指摘できよう。チャックＤは、この変化を、黒人がアメリカ社会に「経済的に統合（インテグレーション）されたことは、ブラック・コミュニティの崩壊（ディスインテグレーション）を意味した」と鋭敏に直観している語っている[61]。

かかる情況に直面し、センテンシング・プロジェクトの調査部副長のマーク・マウアーMarc Mauerは、次のような危機感を表明している：

> 刑務所での経験がこんなにも一般的になって、［刑事罰がもつ］抑止力にいかなる効果があるのでしょうか。刑務所に送られることがごくありきたりのことになっているところでは、黒人男性の成長過程のなかで刑務所での暮らしは避けられないこと、個人の力ではどうしようもないこととみなされる可能性があります[62]。

ギャングスタ・ラッパーたちが身を置いているのは、このような場である。

この事態に対して、マウアー（と多くの犯罪学者）は、犯罪の厳罰化に向かっている当時の政策を改め、犯罪の抑止と犯罪者の更生プログラムの充実を図る提案を行っている[63]。紙幅の都合上、ここでは政策や政策提言の内容に立ち入ることができない。本稿の主題にとっての問題は、むしろこの実証的事実こそが人種主義的心像を逆説的に補強してしまうところにある。

たとえば、レーガン政権では教育省長官、ジョージ・H・W・ブッシュ政権のもとでは麻薬政策管理局局長として「ドラッグとの戦争」の先頭にたったウィリアム・ベネットWilliam Bennettは、「犯罪率を低下させようと思えば、これだけは確かだと思います、もしそれだけが目的だとすれば、妊娠している黒人に中絶させるのです、そうすると犯罪率は下がるでしょう」とショッキングな発言したことがあった。もっともこの直後に彼は、「それは不可能だし、ばかげているし、道義的問題がある」と付け加え、あくまでも仮定の話だと言ってはいるが、それでもしかし、ここで彼が「黒人」と「犯罪」を同等視している事実は揺るがず、そもそも主張そのものが非論理的であることにはまったく無自覚である。未だ生まれていないものにさえ犯罪性をみていることからわかるように、彼ははっきりと〈黒い肌をもったものの血＝犯罪〉というおぞましき等式を思い描いているのであり、この等式なくしてはそもそも犯罪率低下の推論は成り立たない[64]。これを「舌禍」で済ませてしまえば、彼の持論の「論理性」を黙認したことになる。人種主義は、実証的事実に依拠していることを装うことができるのだ。それは他面で、一部の「黒人」、「犠牲者の立場に自分を囲い込んだものたち」の防御姿勢を固くさせる。

黒人の犯罪率が高い、あるものはそこに社会問題を見てとり、別のものはそこに人種的性向を見てとる。黒人の受刑者について語ることは、したがって、パンドラの箱を開けるに等しい。2Pacはこうラップしている。「俺たちは恐ろしい早さで地球から消されちまっている／もっと恐ろしいのは俺たちの誰もそれに反撃しないこと」[65]。つまりギャングスタ・ラッパーたちは、この箱を大胆に開けることを選んだのである。この行為を、研究者のなかには、脱工業化の結果として消え去ってしまった黒人の公共圏を「デジタル化して模写したもの」であると語るものもいる[66]。

コスビーが見つめているのもまた同じ社会である。2005年、ブラウン判決から半世紀以上が経過したこの年、「刑事罰に服している」黒人は91万人に達し、この半世紀で9倍に至った[67]。あの判決が何だったのかという問いは、したがって、ワカントにもコスビーにも、さらには刑務行政の改革を求めているものにも、そして「革命家」の息子2Pacにも、すべてに通底するものである。ところが、「一箇のパウンドケーキ」の話を笑いの素材にしたときに、コスビーは、環境や政策を非難する立場から、黒人に特有だと考えられている行状を告発することを通じて、問題を「自己責任」に帰する側に身を置いた。

このコスビーの黒人内部におけるポジション取りは、次の実例とつきあわせれば鮮明になる。受刑者人口を急増させた原因のひとつに処罰の厳格化、いわゆる「三振制度」three-strikes-you-are-out systemがある。累犯（レイビィビズム）への対処として拡まったこの制度に関して、現役の警察署長や判事、検察官から人権団体、さらにはヒップホップ雑誌の編集者までを集めた民間団体、全国刑事裁判委員会National Criminal Justice Commissionの報告書は、次のような事件を紹介している。

> ラリー・フィッシャー、35歳は、ポケットのなかに手を突っ込んで銃をもっていると装い、シアトル近郊のパン屋で135ドルを強奪した。それ以前の8年間、彼はこのほかにも二つの軽い窃盗を犯していた。これまでの伝統的量刑制度だと、この度の強盗の罪科に対し2年の懲役刑に処せられることになったであろう。しかし、ワシントン州でついこのほど施行されたばかりの「三振制度」の

もとでは、これが3度目の犯罪であったために、仮保釈の可能性のない無期懲役に処せられたのである[68]。

これはジョークの素材になる話ではない。コスビーが「奴ら」と言及するとき、社会観の世代間格差が見え、さらに重要なことに、黒人のあいだでの差異を明確にしようとする彼自身の機制が駆動する模様が見える。ギャングスタ・ラップの行動がハイパーリアルな「逸脱行為」を強調し、ラッパーたちが「犠牲者の立場」を放棄して攻撃的な自己主張を続けるゆえに、その機制はなおさら強く働く[69]。そのような「黒人文化」ならびに「ブラック・アイデンティティ」の有り様に関し、マイケル・ドライソンMichael E. Drysonは、「コスビー演説」を論じた著書のなかで、次のように述べている：

> ブラック・アイデンティティは複雑なものなのだと主張することには、より大きな問題が関係している。このようなブラックネスの概念は、ブラック・アイデンティティの常変性や多層性を認めるだろうか。そのアイデンティティに内在する矛盾や葛藤、黒人の生活にみられる善悪の両面をしっかり説明づけられるだろうか。黒人はこれまでずっと複雑性を忌避してきた。なぜならば、黒人のアイデンティティをステレオタイプ化して考える白人の観念が、あまりにも広く瀰漫していたからである。白人の公衆（ホワイト・パブリック）は、黒人の生活に病理に蝕まれていることの確証に絶え間なく飢えているのだが、自分たちの裏庭で起きている同じ問題には気づかずにいる。そのような公衆に向かって、黒人の生活の醜い側面を曝すことをわれわれは躊躇してきたのである。それゆえ、黒人のアイデンティティを規定する過程のなかで、黒人の文化すらも固定されたものになった。ポジティヴで、欠点がなく、有徳なものだけを、黒人が認めるようになった。そうして、いまだに遠くが見通せず、時によっては必要以上に防御的になるのである。文化のなかを流通しているネガティヴな情報のために、黒人はいわば「否定的アイデンティティ税」というべきものを支払わされている。だからこそなおさら、複雑さを認めることは人種的成熟を示す行為なのである。しかし、ポジティヴ対ネガティヴの二分法から身を離すことができないものには、その行為は痛みである。コスビーは得てしてそのような人間のひとりになっている[70]。［傍点強調、筆者］

コスビーと異なり、2Pacはそのような社会にこう応じる。「あんたに暴力を奮ったこともなければ、極道渡世をアメリカで最初に送りだしたのも俺じゃない、なのになぜこんなに迫害されなくちゃいけないんだ」[71]。そのような彼が定義する「ニガ」の首には金のネックレスがぶら下がっているのだ。

## おわりに

「コスビー演説」の10年も前のこと、シモンズのヒップホップ・レーベルの共同経営者だったビル・アドラーBill Adler（ユダヤ系白人）は、黒人で文学者のヘンリー・ルイス・ゲイツ・ジュニアHenry Louis Gates, Jr.に、このような興味深いエピソードを伝えていた：

> 彼［シモンズ］はこう言っていた。「おい、アフロ・アメリカンの生活の表象として最も人気のあるのはいまのところビル・コスビーだ。しかし、それは理想。俺のはリアリティ。黒人だったら、ハクスタブル先生[ii]より、ＬＬクールＪ[iii]の方がもっと近くにいる存在だろう。俺のアーティストは

ほんものなんだ。だからみんなから耳を傾けられなくちゃいけない」。肝心なところは、音楽の政治性。政治性と言っても歌詞が政治的である必要はないんだ、音楽の効果が政治的だったら良いんだ[72]。［傍点強調、筆者］

黒人の存在を政治化すること、シモンズはそれも（ビジネス上の利得とともに）意図していたし、そうしたのは70年代に入り「黒人中流の興隆」のなかで黒人の社会政治的存在に明示的政治性がなくなってしまったからだ。ところが彼のなかでは、経済的社会階梯を上昇しようとする起業家精神は、黒人の政治性と奇妙な共存関係を保っている。

このときに起きていた政治社会上の変化は、カッツらによると、こう結論づけられる：

20世紀のうちに、社会的、経済的、政治的な排除に基づいて黒人を劣位に置いてきた歴史的パターンはほとんど粉砕されていった――その結果、2000年までには、再編成された社会の性質にしたがって、新しい不平等の布置情況が生まれることになった。20世紀初頭、アメリカの黒人と白人のあいだを隔てるものは、その原因であれ結果であれ、互いが重なりあい補完しあう関係にあった。新しい不平等の布置情況に特徴的なものは、不平等を創り出すに至った累積的過程であり、人種内部における差異がその過程の産物なのである[73]。［傍点、原典イタリック］

つまり、21世紀の前にミドル・アメリカに入れなかったものは、それまでの累積的な結果として、その社会でのメンバーシップが否定されるのである。ヒップホップ・アーティストの多くが犯罪と強い関係をもっていること、それは、この過程の産物である。ヒップホップとは、21世紀の人種関係から生まれ、その秩序／序列に抗っている文化様式なのだ。

「人種は構築されたものである」、この謂いには、生活世界において「リアリティ」がない。この点に関し、シカゴ大学で教鞭を執っている歴史家トーマス・ホルトThomas C. Holtは、若い学生との対話のなかから得た判知に基づき、社会構築論の問題点をこう剔抉する：

人種に関するコースを担当しているわれわれにとって、言説戦略上の闘争の火蓋が切られるのは毎年の第一回目の授業である。そのときに賭せられているものは大きい。なぜならば、人種の問題解決の進捗状況に関し、学生たちが年度を重ねるごとに悲観的になっているからだ。では悲観論がどこから生まれているのかというと、わたしはこう確信しているのだが、それは日々強力になる保守主義からではなく、人種に関する問題域を概念化するわれわれの方法論への不信からである。

いつも最初の授業ではコースを通じて議論を闘わせることになる基礎的概念の定義づけをいくつか行うのであるが、そのなかでもちろん最も重要なのは人種の定義それ自体である。現在のほとんどの学術研究は、人種とは社会的に構築されたものであるという前提から出発する。多くの点においてかかる性格づけは正しいものである。しかし、ポピュラーなものであれアカデミックなものであれ、人種に関する最新の言説について最も特徴的な点は、いわゆる「学識」が大学の外での議論にほとんど浸透していないことであり、研究者たち自身も旧来の思考の習慣に簡単に帰ってしまう

ii 「ハクスタブル先生」：コスビーがネットワークテレビで演じていたブルックリンに住む黒人医師の役。アッパーミドルクラスの家庭の所帯主の「典型」であるとされ、当時黒人がかかる役割を演ずるのは「画期的」なことであった。

iii 「ＬＬクールＪ」：デフ・ジャム・レーベルのなかで最も人気のあったラッパーの一人。

ことである。おそらくそうなるのも、「社会構築論」の言説に非現実的なところがみられるからであろうと思えるし、それゆえに影響力が限定されてしまうのである。社会構築論の呪文を唱えることを超えて探求を行うこと、生きられた経験とは何であるのかを問いかけること、その概念が一般に流布している言説を高踏的に否定しまうことや概念自体に内在する皮相さの責任を負うこと、これらすべてのことにわれわれはみな失敗しているのである[74]。［傍点強調、筆者］

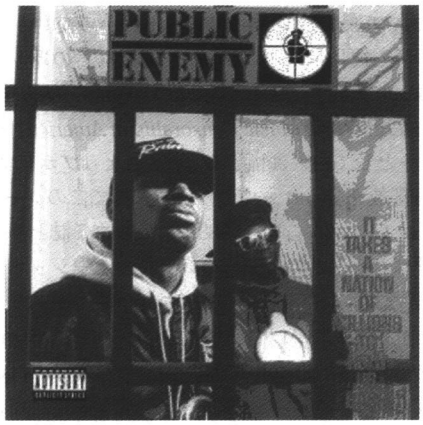
「インナー・シティ」「犯罪」「ドラッグ」といった言葉は、「黒人」という人種を構築すると言ったところで、黒人の実存の説明にはならない、ホルトはこのことを的確に認識しているのである。筆者が序論でホリンガーの議論に留保条件をつけたのはそのためだ。ところで、ラッパーたちは、生きられた経験とは何であるのかを、激しく問い続けてはいないだろうか。

おそらく現在は人種民族国家の縛りが解体される只中にあり、ヒップホップは、公民権運動がたどりついた両義的な場に現れた両義的な文化表現であると考えられる。ヒップホップの想像力は、「増幅されたリアリティ」を突きつけることで、秩序＝序列に亀裂を入れる。その亀裂に目を塞ぐことなく、そしてまた人種間や世代間の対立を隠蔽することなく、何故その対立が起きたのか、その理由を問いかけることを通じて「リアル」に迫り、対立を解消できる審級を見いだすとき、われわれは血糊のついたバットをきっと説明できる。



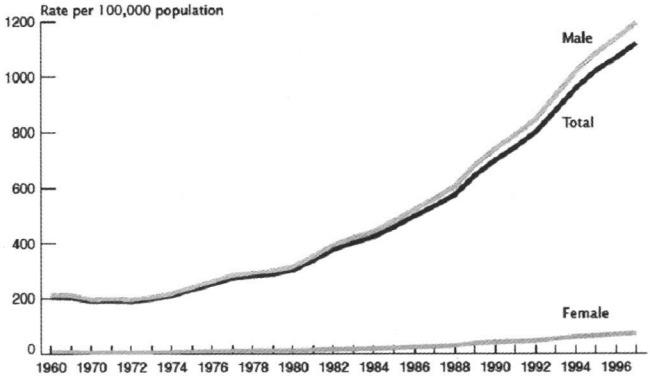
## 資　料

【図１】Parental Advisory



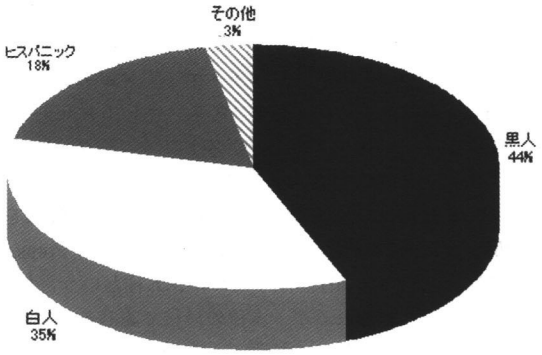

【図２】*It Takes a Nation of Millions to Hold Us Back*のジャケット

【グラフ１】囚人人口の変遷




U.S Census Bureau, *Statistical Abstract of the United States: 2000* (Washington, D.C.: Government Printing Office, 2000), p.202.

【グラフ２】受刑者の人種別割合




Source: Department of Justice,"Prison and Jail Inmates at Midyear 2002," *Bureau of Justice Statistics Bulletin*, April 6, 2003, p.11.

## 注

1 1980年代中葉まで「ヒップホップ」といった場合、(1)強いビートに併せて韻を踏んだ語りをする「ラップ」、(2)その「ラップ」の合間に行われる曲芸的舞踏の「ブレークダンス」、(3)廃屋やガレージの壁に独特の様式で書かれた絵画や文字の「グラフティ」、これら三つの要素から構成されていた。現在広く知られ、また根強い人気をもっているのは、その一要素、ラップのみである。なお、ヒップホップ草創期のアーティストたちが使用したターンテーブルやマイク、アンプシステムなどは、スミソニアン博物館に展示され、公式のアメリカ文化の仲間入りをしている。Ben Sisario,"Smithsonian's Doors Open to a Hip-Hop Beat,"*New York Times*, March 1, 2006.

2 Corey Kilgannon,"Tolerance for a Racial Slur Is a Test for Potential Jurors,"*New York Times*, May 18, 2006.

3 "Excerpts From the Defense's Closing Arguments in the Trial of O.J. Simpson,"*New York Times*, September 29, 1995. このときの「ドリーム・チーム」のリーダーだったジョニー・コーコランJohnnie Cochranは、この後、本稿で詳述するトゥパック・シャクールなど、多くのギャングスタ・ラッパーの刑事裁判で弁護士を務めることにもなる。

4 Mick Meenan,"Witness Defends Use of Epithet,"*New York Times*, June 6, 2006. なお、ハワード・ビーチは、人種暴動に至るイタリア系アメリカ人と黒人の対立を描いた映画『ドゥー・ザ・ライト・シング』の素材となった人種主義的暴力事件が起きた場所として有名である。

5 *Plessy v. Ferguson*

6 黒人奴隷は、奴隷のコミュニティにおいて、特異な情報伝達様式を発達させていた。「白人」が規定する意味に默従するのではなく、それを換骨奪胎(アプロプリエート)していたのである。たとえば、奴隷のコミュニティにおいて、"bad"は、それを発する音調の違いで"good"を意味していた。それは、奴隷制社会の規範を受け入れたならば、生きる力が失せるからである。Lawrence W. Levine, *Black Culture and Black Consciousness: Afro-American Folk Thought from Slavery to Freedom* (New York: Oxford University Press, 1977), pp.417-418, p.420. 本稿の議論の主題であるギャングスタ・ラッパーの「ニガー」の意味論は概ねこれと同じ図式であると考えても良い。

7 Marshall Frady, *Jesse: The Life and Pilgrimage of Jesse Jackson* (New York: Random House, 1996).

8 Gerri Hirshey, *Nowhere to Run: The Story of Soul Music* (New York: Da Capo, 1984), p.265.

9 *New York Times*, May 18, 2006. 黒人の内部におけるこの言葉に対する感覚の相違は次のドキュメンタリーに生々しく記録されている。Todd Larkins, *The N Word: Divided We Stand* (Post Consumer Media Production, 2004). このDVD副題は、911テロ直後、アメリカ愛国心を鼓舞したスローガン"United We Stand"から変奏されたものである。 なおこの裁判に関し、弁護側の主張を陪審は受け容れることができず、被告は「ヘイト・クライム」の罪科でも有罪が宣告され、懲役15年の刑が言い渡された。Corey Kilgannon, "Howard Beach Attacker Sentenced to 15 Years," *New York Times*, July 17, 2006.

10 Eric D. Nuzum, *Parental Advisory: Music Censorship in America* (New York: Quill, 2001).

11 この時期、パフォーマーとして白人は稀であったが、ヒップホップ関連の事業のなかで白人のプレゼンスは決して小さくなかった。たとえば、最多の発行部数を誇るヒップホップ情報誌でこのシーンの拡大に多大な貢献をした*The Source Magazine*は、当時ハーヴァード大学学生だった白人によって、1988年にミニコミ誌として創刊されたものである。

12 「サンプリング」と呼ばれるほかの音楽家の録音をコラージュする技法を使うヒップホップにおいて、レコードを回すディスクジョッキー、DJは、技術者ではなく、音楽を創造するメンバーの一員である。

13 ビースティ・ボーイズの公式サイトを参照。"The Story of Yo," Beastie Boys Message Board,March 16, 2006. http://www.beastieboys.com/bbs/showthread.php?t=64443 [Last accessed January 19, 2007]

14 人種を論じている研究を読むにあたり、良きにつけ悪しきにつけ、著者の人種的アイデンティティによって「読み方」が変わってしまうのは、何も筆者にかぎられたことではないはずである。実のところ、批判的探求のうえで、われわれに「カラーブラインド」になることは許されていない。

15 このときの論争を、アメリカ黒人の歴史のリサーチに基づき、被差別者集団のアイデンティティ形成や、何が「差別」を構成するのかといった問題に取り組んだものとして以下を参照。灘本昌久『ちびくろサンボよすこやかによみがえれ』(径書房、1999年)。本稿の構えは同書の論考、著者との対話、そして何よりも径書房のスタッフとの議論に触発されたところが大きい。筆者が抱えている課題をテーマ化するのにあまりにも時間がかかり過ぎてしまったが、ここに記して感謝の意を表したい。

16 「白人」「黒人」「アメリカ・インディアンおよびアラスカ先住民」「アジア系および太平洋島嶼人」「ヒスパニック」の5つの分類を指し、ホリンガーはこれを「エスノ=レイシャル・ペンタゴン」と呼んだ。

17 デイヴィッド・ホリンガー『ポストエスニック・アメリカ：多文化主義を超えて』(明石書店、2002年)、28頁、47頁、178頁。ガーナ系アメリカ人のクワメ・アッピアも、「文化」と「人種」を混乱して同等視する傾向に警告を発し、「被奪者集団が特異で安定した文化的共同体を形成しているとすれば…隔離を行うのが最も効率なことになる」と述べている。Kwame A. Appiah, *The Ethics of Idenity* (Princeton: Princeton University Press, 2004), p.127.

18 筆者は、人種の構築性を示すために、人種という言葉にすべてカギ括弧を付したことがあった。おそらくそうする方が学術的には正確であると思われるが、本稿の最後で論じるように、学術上の精緻さが生活世界に対する理解の深化に繋がるとはかぎらない。また、政治的妥当性への拘泥が、現象を過度に複雑化することもあり得る。肌の色が問題となっているのに色への言及を忌避するのは、人種主義の「ネガ」である。本稿では、したがって、特に構築性を強調するときにのみ人種を表示する名詞にカギ括弧を施すにとどめる。

19 これまでも筆者は「ブラック・アメリカ」という言葉を使ってきたが、ここで改めてその定義づけを行っておく（なお、英語の文献では頻出する表現である）。これは、いわゆる「黒人」が存在する、想像上の、そして／または物理上の空間のことを指し示す。したがって、現存する都市ゲトーの場合もあれば、映画などで描かれる想像上の黒人社会の場合もあり、そしてまた、ディアスポラ概念の影響を受けて、場から切断された紐帯を示すこともある。

20 アメリカにおける人種隔離制度は、1964年公民権法と1965年投票権法の二つの立法によって瓦解した。本稿では、法によって是認された差別が消えさりつつも、実質上の人種間格差が残っている65年以後の時代を「ポスト公民権時代」という言葉で示す。

21 Michael B. Katz, Mark J. Stern, and Jamie J. Fader,"The New African American Inequality,"*Journal of American History,* 92 (June, 2005), p.105. 同様に黒人内部の分極化の問題を分析したものとして、以下の古典を参照。William Julius Wilson, *The Truly Disadvantaged: The Inner City, the Underclass, and Public Policy* (Chicago: University of Chicago Press, 1987).

22 Reynolds Farley, *The New American Reality: Who We Are, How We Got Here, Where We Are Going* (New York: Russell Sage Foundation, reprint ed., 1998).

23 以下に引用する演説は、「コスビー演説」に関する論文を集めた*Black Scholar*に転載されたものである。同誌が特集を組んだことに示されているように、この演説は、黒人コミュニティ内外で大論争を引き起こした。本稿は、コスビー演説の賛否をめぐる論戦に直接参加するよりも、21世紀アメリカのブラック・コミュニティを見つめるというより広い観点から、ここに取りあげる。翻訳語がかなり粗暴ではあるが、それはコメディアンの語調を伝えようとした結果である。

24 Bill Cosby,"Dr. Bill Cosby Speaks at the 50th Anniversary Commemoration of the *Brown v. Topeka Board of Education* Supreme Court Decision, May 22, 2004," *Black Scholar,* 34 (Winter 2004), p.3.

25 「ラティーノ」という分類は、「人種」ではなく、「言語集団」のカテゴリーであり、そのなかには肌の黒い人、いわゆる「黒人」も含まれる。したがって非ラティーノ系黒人と言った場合、具体的には、スペイン語を母語としない黒人を指示対象とし、現状ではその大多数がいわゆる「アメリカ黒人」である。

26 National Center for Education Statistics, *Dropout Rates in the United States: 2004,* November 2006 (Washington DC), p.26.

27 *Dropouts: Keeping Students in School, Civil Rights in Brief,* October 22, 2002, the Civil Rights Project, Harvard University, http://www.civilrightsproject.harvard.edu/resources/civilrights_brief/Dropouts.pdf [Last accessed February 1, 2007]

28 U.S. Department of Health and Human Services,"Births: Preliminary Data for 2004,"*National Vital Statistics Reports,* 54 (December 29, 2005), p.3.

29 Cosby,"Dr. Bill Cosby Speaks," pp.3-5.

30 70年代、刑務所では自殺防止のためにベルトの配給が止められた。体躯の小さなものに大きすぎるパンツが配給された場合、それを臀部で止めるよりほかなかった。これがこのスタイルの起源だと言われている。Chuck D with Yusuf Jah, *Fight the Power: Rap, Race and Reality* (New York: Delta, 1997), p.46. もちろん、これは日本でも見られるスタイルではあるが、そのルーツはまったく認識されていない。ヒップホップが越境するときにいかなる変容が起きるのか、それはまた興味深いテーマである。

31 Todd Boyd, *The New H.N.I.C.[Head Niggas in Charge]: The Death of Civil Rights and the Reign of Hip-Hop* (New York: New York University Press, 2003), pp.xix-xx. また、黒人で歴史家のロビン・D・G・ケリーも、ボイドと類似した認識に立っていると言っても良いであろう。わけても以下の著作を参照。Robin D. G. Kelley,*Yo'Mama's Disfunktional!: Fighting the Culture Wars in Urban America* (Boston: Beacon Press, 1997).

32 Nelson George, *Hip Hop America* (New York: Penguin Books, 1998), p.xi. 初期のヒップホップに関しては以下を参照。*Wilde Style* (DVD), Wild Style Productions Ltd. Jes Pictures, JES-1001 (1982); Ed., Alan Light Havelock Nelson, *The Vibe History of Hip-Hop* (New York: Three Rivers Press, 1999).

33 今日の黒人青年の「社会的逸脱行為」とヒップヒップ文化の関係性を見るのは、コスビーにかぎられたことではない。ジャマイカ系黒人の歴史人類学者で、現代の人種関係に関する時事論評も多く著しているハーヴァード大学教授のオランドー・パタソンも、黒人青年が「ディオニソスの罠」に嵌っているとし、主流文化となったヒップホップにその原因のひとつを求めている。Orlando Patterson,"A Poverty of the Mind,"*New York Times,* May 26, 2006. また、ヒップホップが描く光景は、マスメディアによって歪められた白人のファンタジーに過ぎず、それに黒人も欺かれているという議論もある。以下を参照、Andrea Queeley,"Hip Hop and the Aesthetic of Criminalization,"*Soul,* 5 (Winter, 2003): 1-15. しかし、何が現実であり、何が歪曲であるのかを判断するには、判断基準の提示が当選必要である。同論文はそれを怠っている。筆者は、社会経済的力関係が非対称的な集団のあいだの接触の場であろうとも、力あるものがなきものを一方的に押しつけて搾取（エクスプロイテーション）するという截然とした構図は、両者の関係にあるヘゲモニー的権力編制を軽視した過度に硬直化した見方である、と考える。奴隷制下の主奴関係に示されているように、弱者が強者の力を簒奪（アプロプリエーション）する契機があるのだ。また、本節で論じているように、「ギャングスタ」の心像は黒人自身が主体的に創造していったものでもある。奴隷制下の事例については、既出Levineの文献とともに、以下を参照。Eugene D. Genovese, *Roll, Jordan, Roll: the World the Slaves Made* (New York; Vintage Books).

34 同時期のニューヨークについては以下を参照。「「二重の不可視性」を生きる西インド諸島系移民：人種の政治とアムネスティ法案」樋口映美・中條献編『歴史のなかの「アメリカ」』（彩流社、2006年）：326-348頁。

35 Tricia Rose, *Black Noise: Rap Music and Black Culture in Contemporary America* (Hanover, Mass.: Wesleyan University Press, 1994), p.4.

36 60年代以後のネイション・オヴ・イスラームについては以下を参照。大類久恵『アメリカの中のイスラーム』（寺子屋新書、2006

年）：Mattias Gardell, *In the Name of Elijah Muhammad: Louis Farrakhan and the Nation of Islam* (Durham: Duke University Press, 1996); Arthur J. Magida, *Prophet of Rage: The Life of Louis Farrakhan and His Nation* (New York: Basic Books, 1996).

37 Russell Simmons, *Life and Def: Sex, Drugs, Money + God* (New York: Random House, 2001), pp.38-39. ファイヴ・パーセント・ネイションの正式名称はthe Nation of Gods and Earthsであり、創始者のクラレンス13Xはもともとマルコム Xが牧師職にあったNOIのハーレム寺院の信徒であった。同団体の詳細については公式ウェブサイトを参照。http://www.allahsnation.net/

38 この問題に関しては、拙稿「映画『マルコム X』再考――アメリカ黒人の空虚な身体」『季刊前夜』6号（2006年1月）：105-108頁を参照。

39 Chuck D, *Fight the Power*, p.86.

40 Ibid, pp.26-27.

41 Simmons, *Life and Def*, p.xiii.

42 Mark Anthony Neal,"Sold Out on Soul: The Corporate Annexation of Black Popular Music,"*Popular Music and Society*, 21 (Winter, 1997), p.129.

43 Bill Yousman,"Blackphilia and Blackphobia: White Youth, the Consumption of Rap Music, and White Supremacy,"*Communication Theory*, 13 (November 2003), p.367.

44 Chuck D, *Fight the Power*, p.250.

45 彼は一般に2Pacと表記されることが多い。本稿では以下、彼に言及する際、ヒップホップ特有のオーソグラフィを紹介するために、2Pacという表記を用いる。2Pacの学術的先行研究として以下を参照。Michael Eric Dyson, *Holler If You Hear Me: Searching for Tupac Shakur* (New York: Basic Books, 2001).

46 Eds., Ward Churchill and Jim Vander Wall, The COINTELPRO *Papers: Documents from the FBI's Secret Wars Against Dissent in the United States* (Boston: South End Press, 1990); Huey P. Newton, *War Against the Panthers: A Study of Repression in America* (New York: Writers and Readers Publishing, 1996).

47 2Pacの義父ムツゥルー・シャクールMutulu Shakurは、BPPのメンバーを中心に結成された武闘派「セクト」黒人解放軍Black Liberation Armyの活動家であり、1988年に、同じくBPP活動家の妹のアサータ・シャクールAssata Shakurの脱獄とキューバへの亡命を幇助した罪と強盗罪で有罪となり、懲役60年の刑に処せられた。アサータは、その後、キューバで自伝を著したが、亡命時の詳細については何一つ明らかにしていない。Assata Shakur, *Assata: An Autobiography* (Chicago: Lawrence Hill Books, 1987).

48 Ed. Alan Light, *Tupac Amaru Shakur*, 1971-1996 (New York: Three River Press, 1997), p.156.

49 Lola Ogunnaike,"Tupac Shakur: Dead Man Talking,"*New York Times*, November 9, 2003.

50 Drummond Ayers, Jr.,"The 1992 CAMPAIGN: The Campaign Trail; On Quayle's List: a Rapper and a Record Company,"*New York Times*, September 23, 1992.

51 Light, *Tupac Amaru Shakur*, pp.154-155.

52 現在のストリート・ギャングの抗争に関する研究としては、以下の研究を参照。Tom Hayden, *Street Wars: Gangs and the Future of Violence* (New York: New York Press, 2004)。なお同書の著者は、かつて民主社会のための学生たちStudent for Democratic Societyの会長を務め、60年代学生運動のシンボルだったものと同一人物である。また、ロサンゼルスのストリート・ギャングに関しては、その規模の大きさや抗争の激しさでさまざまな関心を集め、当事者による回顧録がいくつか著されている。以下を参照。Sanyika Shakur [no relation with Tupac], *Monster: The Autobiography of An L.A. Gang Member* (New York: Grove Press, 1993); Yusuf Jah and Sister Shah'Keyah, *Uprising: Crips and Bloods Tell the Story of America's Youth in the Crossfire* (New York: Simon & Schuster, 1997); Leon Bing, *Do or Die* (New York: HarperPerenial, 1992).

53 Randall Sullivan, *LAbyrinth* (New York: Grove Press, 2002); Frank Alexander with Heidi Sigmund Cuda, *Got Your Back: Protecting Tupac in the World of Gangsta Rap* (New York: St. Martin's, 1998); Ronin Ro, *Bad Boy: The Influence of Sean "Puffy" Combs on the Music Industry* (New York: Pocket Books, 2001); Cathy Scott, *The Killing of Tupac Shakur*, revised and expanded ed., (Las Vegas: Huntington Press, 2002); Idem, *The Murder of Biggie Smalls* (New York: St. Martin's, 2000).

54 Akinyele Omowale Umoja,"Repression Breeds Resistance: The Black Liberation Army and the Radical Legacy of the Black Panther Party,"in *Liberation, Imagination, and the Black Panther Party: A New Look at the Panther and Their Legacy*, eds. Kathleen Cleaver and George Katsiaficas (New York: Routledge, 2001), p.6. 註にて既出のロビン・D・G・ケリーは、アッパーミドルクラスの黒人指導層のサンクションに縛られない下層の黒人たちの自発的行為が、時に暴力として表現されながらも、運動に新しい駆動力を加えたモメントを黒人解放運動の貴重な転換点として重視している。Robin D.G. Kelley, *Race Rebels: Culture, Politics, and the Black Working Class* (New York: Free Press, 1994), pp.88-92. 彼のこの視線は、また、ギャングスタ・ラップに、社会政治的対抗文化や新たな公共圏の創造の可能性を見据えている。Ibid, pp.183-227.

55 David Horowitz and Peter Collier, *Destructive Generation: Second Thought about the '60s* (New York: Free Press, 1989), pp.296-297.

56 政治学者のマニング・マラブルによると、NAACPを初めとする主流の公民権団体は、黒人受刑者が急増している問題を認識はしているが、運動が取り組むべき大きな課題とはしていない。Manning Marable,"Racism, Prisons and the Future of Black America," Znet, http://www.zmag.org/racismandblam.htm [Last accessed February 3, 2007]

57 Loïc Wacquant,"From Slavery to Mass Incarceration: Rethinking the"Race Question"in the US,"*New Left Review*, 13 (January-February, 2002), p.41.

58 Marc Mauer, *The Crisis of the Young African American Male and the Criminal Justice System*, a Brief Prepared for U.S. Commission on Civil Rights (Washington, D.C.: Sentencing Project, April 15-16, 1999), p.3.

59 Ibid, p.3.

60 *Durham Morning Herald*, March 6, 1990.

61 Chuck D, *Fight the Power*, p.39.

62 Mauer, *The Crisis of the Young African American Male and the Criminal Justice System*, pp.11-12.

63 Ibid, pp.16-17.

64 Eugene Robinson,"A Specious 'Experiment'," *Washington Post*, October 4, 2005, p.A23. もっとも受刑者にみられる人種別割合を均等化するために、より多くの「白人」を投獄する、というのも、「論理的」な政策オプションであろう。しかし、もちろん、かかる政策も、ベネットの主張と同じく、とても「まとも」な社会政策であり得るはずがない。このような論理が成り立てば、粉飾決算の命令や株価操作等々、「経済犯」のなかに占める「白人」男性の比率が高いので、白人男性の子供が生まれなくさせれば、アメリカの株式市場の透明性は高まるという「理屈」も成り立つし、ベネットの発言に激高し実際にそのように論じる新聞への投書も見られた。以下を参照。"Bennett's Remarks Elicit Controversy: Former Education Secretary Made Remarks on Talk Show Last Week," *Washington Post*, October 5, 2005. ヒップホップをめぐる政治的断線は、リベラル対保守の二分法に回収できず、20世紀から21世紀への転換期のアメリカ社会を理解するひとつの鍵である。彼は、また、憲法修正1条を停止してラップの販売・放送を求める、強硬な規制論者としても有名である。

65 "Word of Wisdom,"in *2Pacalypse Now*.

66 Neal,"Sold Out on Soul," p.134. ヒップホップの「デジタル化された公共空間」としては、以下のラッパーによるブログが好例である。Davey D's Hip-Hop Corner http://www.daveyd.com/

67 The Sentencing Project, *New Incarceration Figures: Thirty-Three Consecutive Years of Growth*, December, 2006, p.3.

68 Ed., Steven R. Donziger, *The Real War on Crime: The Report of the National Criminal Justice Commission* (New York: HarperPerennial, 1996), p.19.

69 ラップに表現されている犯罪性、さらにはパフォーマーたちに犯罪歴があることがかえって音楽の人気に繋がっていること、これらはラップに対する批判の中心でもある。Kelefa Sanneh,"A Rapper's Prison Time as a Resume Booster," *New York Times*, March 24, 2005.

70 Michael Eric Dyson, *Is Bill Cosby Right?: Or Has the Black Middle Class Lost its Mind?* (New York: Basic Civitas Books, 2005), pp.36-37.

71 Eds. Jacob Hoye and Karolyn Ali, *Tupac: Resurrection*, 1971-1996 (New York: Atria Books, 2003), p.130.

72 Henry Louis Gates, Jr.,"Sudden Def," *New Yorker*, January 19, 1995, p.36.

73 Katz, *et.al.*, "The New African American Inequality," p.76.

74 Thomas C. Holt, *The Problem of Race in the 21st Century* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2000), pp.9-10.